



最優秀賞
大分県教育委員会教育長賞

麹と共に生きる

～麹菌を育てる蔵を持つ白杵の住まい～



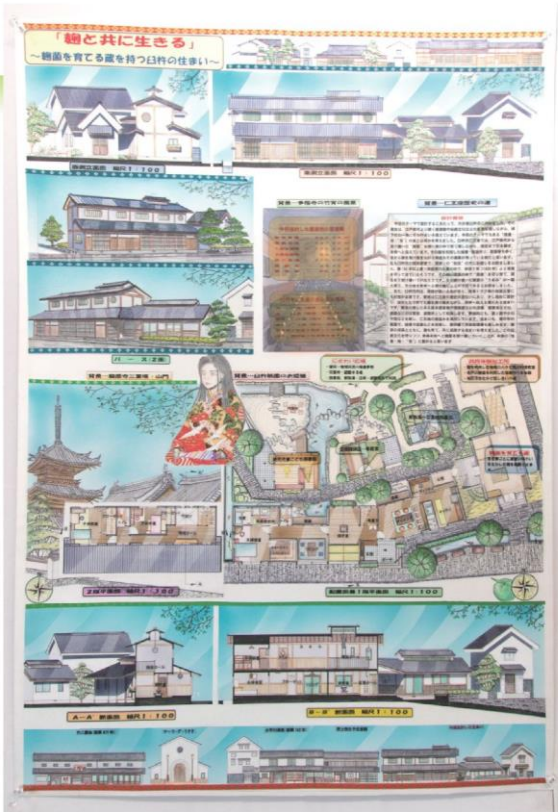
大分工業
白杵 有実

設計主旨

今回のテーマで設計するにあたって、大分県白杵市に決めました。その理由は、江戸時代より続く建造物や伝統文化などの風情を残しながら、城下町の一角にその行まいを構えています。今回のテーマでもある「地産・地生」の生とは何かを考えました。白杵市仁王座では、江戸時代から受け継いだ「麹菌」を暗い蔵の中で育て残しながら、現在まで引き継ぎ、未来へと伝えていきます。その麹菌を利用した味噌・醤油作り、酒蔵等も多く、昔から麹を受け継ぎながら現在もその産業が残っている街だと思えます。

私も白杵市の現地調査で、酒造りの「杜氏」の方にお話しをお聞きしました。築150年以上建つ海鼠蔵の土蔵の中で、安政2年（1855年）より酒蔵を守ってきたそうです。その暗い酒蔵の中で「黒麹」を守り育て、現在まで受け継いでいたそうです。その受け継いだ麹菌の「うまみ」が一番大事で、その味を未来へと受け継ぐことが大切であるとお聞きしました。

また、白杵市内は、海拔が低い土地が多く、南海トラフ等の地震災害にも対策が必要です。敷地は仁王座の歴史の道沿いにあり、少し高台に設計し、自分たちで育てた麹を受け継ぎながら、未来へ伝える蔵のある住まいです。敷地の周りには絵本図書館や酒蔵頭などの店舗、家族湯などは、地震などの災害時、避難所として利用します。敷地内にも、通り庭や小川や池などを配し、仁王座の街並みを演出しています。住まいも、蔵の中の麹菌で、味噌や塩麹などを利用し、囲炉裏で田楽料理も楽しめます。家族の成長とともに、麹も育て、共に成長する住まいを考えました。この伝統文化を守りつつ、未来永劫へと麹菌を受け継いでいくことが、本当の「地産・地生」に繋がると思えます。



優秀賞

島の文化を繋ぐ家

「みんなの食堂」は少子高齢化に歯止めをかける



建築工業
山崎 三美

設計主旨

私の原住地が保戸島で生活していて、島には何處も訪れることがありました。年が経つ中で、人口減少とそれともなう地獄の低気圧の下が嬉しいのを見てこれです。ですが、この島には多くの魅力もたくさんあると思います。この素晴らしい魅力のある島が多くの人に知ってもらえるように、そして、島に低気圧が困るようにも立ち寄れる食堂を設計しました。

この食堂は、島の海の幸、山の幸を活かした料理を作り、ふるまい、自力で料理を作れなくなってしまった島の高齢の方を助けたり、観光客の方に島の良さを知ってもらえるように考えて設計しました。



優秀賞

自然と調和する明るい家

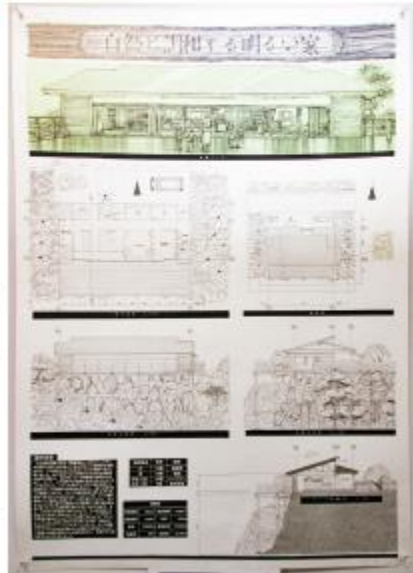


日田林工
中尾 未来

設計主旨

私は設計経験である【地産地消】を考えていく中で、大分県には美しい年月をかけた山田された特徴的な地形があり、その地形はその土地ならではの建物であると思いました。私の地元である日

田市の大山町は周囲を大自然に囲まれ、崖が多いという特徴的な地形があります。そこで、この地形や大自然を活かせるようなプランを考えました。プランを考えていく中で崖を利用した建築物として代表的な清水寺を参考にし、崖から降り出した構造にしました。そして大自然を肌で感じながら生活できるように、大山にある「うめひびき」という崖を参考に崖の南面をすべて開口部にしました。そうすることで南に面する崖からは、景色を一望でき日光も多く取り入れられ開放感を味わうことができます。また、大山町の建築物に崖があります。その特徴を模った高窓などを考える際し合いが出来るスペースを、崖からの景色を眺めることのできる場所を作りました。そしてテーマである自然と調和できる家になる際、木造にし、外観は和をイメージしてデザインしました。さらに南面からだけでなく日光が当たらない北面にも日光が入るように、部屋の横目の部分にも高窓を高くし、北面からも日光が入るよう工夫しました。



佳作

竹かごの中の家

～竹工芸を守る地産地消の家～



鶴崎工業
堤内 晴海

設計主旨

『竹工芸』から生まれる地産地消

別府は竹工芸で全国有数の町。しかし、その技術がモットーの竹工芸が後継者不足で消滅の危機にある。その改善策としてこの地産地消の家を設計した。この住宅は竹工芸でラッピングしており、季節でラッピングを変え様々な変化を与える。また、この広いスペースに囲まれた住宅は竹工芸の作成順序の動線計画に無駄がない位置取りとなっている。まずは、興味を持ってもらう。そして、体験してもらう。そして竹工芸の本質を少しずつ理解してもらう。そしてじっくり時間をかけて後継者を育てる。ここはそのような住宅としている。



佳作

無くなってしまおう小さなお祭り

～昔からある地域のつながりを守る住まい～



鶴崎工業
堀田 林花

設計主旨

【私の田舎では】

私の田舎では、毎年8月14日にお祭りがある。夕方から朝までみんなで話し合いながらご飯を食べる。お酒を飲んだり、カウオケをしたり、花火をしたり…

地域の人たちやその家族が集まり、話したことがない人たちとも仲良くなることできる。そこで新しいつながりが生まれ、祭りのない日に田舎に帰ってもいつも可愛がってくれる。私はこのお祭りはどこにでもあるものだと思っていた。

【今は…】

若い人が街を出て、お年寄りが増え、祭りを続ける人が少なくなってきた。地域の人たちと顔を合わす機会が減ったため、田舎に帰っても昔のように仲良く話せなくなった。また、私より小さい子供たちは、祭りの記憶があまり残っておらず、田舎に帰ると人見知

りが激しく、地域の人を見るとすぐに隠れてしまう。

さらに、若い人が少なくなり、お年寄りが増えたことで祭りを続けようと思う人も減ってきている。

【私の願い】

この祭りがなくなれば、地域がつながる場所がなくなってしまう。小さい子供たちにも、地域と繋がりを持ってもらいたい。話したことがない人たちともすぐに仲良くなる地域独特のこの祭りを大切に守っていきたい。お年寄りの方々が、今までより行きやすく、休めるような場所を作りたい。若い人達も気軽に参加できるように、祭りの楽しさに心躍らせて、時間を見つけては帰ってきたくなる田舎であってほしいと思い、この家を設計した。



佳作

柞原八幡の里 伝統をつなぐ家 ～創造 八幡神楽～



大分工業
西本 翔哉

設計主旨

私は八幡地区の東八幡に住んでいます。「浜の市」は幼少の頃からのかかせない楽しみです。家族も友達もみな当たり前のように太鼓、横笛を奏でて神幸に参加しています。7月の終わりに始まる太鼓の練習は幼かった僕たちが人や地域に迎えられ、仲間とともに成長する場所でした。「浜の市」は神事と奉納の行事がお祭りと呼ばれてにぎやかに行われます。直下でみる花火大会の大輪は夏

の終わりと参加者の充実感を昇華させ、地域への所属感を実感するものでした。

私は小学生の時から太鼓に参加しています。夏休みの毎夜の7時から9時まで、東八幡の公民館へ集まって稽で練習します。小学生から中学生が大人の平ほどきを受けながら、稽笑顔で華白の123番とはね太鼓を練習します。1番より2番、2番より3番と難しくなっています。はね太鼓ができた瞬間はとても嬉しかったことを覚えています。笛を奏でる大人たちのお囃子を懐かしい法被を着て披露する「供奉太鼓」は私の財産です。

敷地は南八幡の高台です。白木と高崎の台地に挟まれた鞍川流域を眼下におき、西大分港～大分市の海岸線～佐賀関～四国を遠望に見ます。

八幡神楽を創設します。その場所を兼ねた白宅を造ります。高台から囀り響く神楽の聲と勇壮な調べに新しい歴史の扉を開け、さらに住民同士の絆を深め、供奉太鼓とともに地域をつなぐものにしていきます。



佳作

自然と文化を生かす家



日田林工
吉田 壘央

設計主旨

私の住む日田では、明治時代から「日田漆器」として漆工芸が盛んに行われてきました。しかし、現在は高齢化に伴い、漆工芸の技術を受け継ぐ人がおらず衰退してしまっています。そこで私は

新しく漆工房を建てることで漆工芸が再興するのではないかと考え、地元の文化を生かし発展させることが「地産地生」に繋がると思い、この設計を行いました。設計するにあたり地域の人に興味や親しみをもってもらいたいと思い、大分県出身の建築家、磯崎新氏の設計したアートプラザを参考にして設計を行いました。コアを大きくとることで、大きな開口部を作ることができ、開放的な空間になるように設計しました。また、フランクロイドライト氏の「カウフマン邸」の様に鉄筋コンクリート構造でも日田の自然の風景に合うように装飾しました。

私は、今回の設計課題の「地産地生」は地元で誰もが安心して住み続けることだと

考えました。安心して永く住み続けることができる様に、1階に木工房と漆工房を置き、2階に住居者の居住空間を配置し、災害用設備を備えることで3年前に起きた地震、2年前の大雨による水害などの自然災害から命を守り、エレベーターやスロープを組み込むことでバリアフリーの対策も施しました。



奨励賞

森の住宅建築

～県産材で四季を感じる～



大分工業
市川 聖大

設計主旨

那馬溪のスギ、ヒノキをふんだんに使用した家を考えました。特に那馬溪といえば、自然の豊かさです。また、秋になると京都の嵐山・嵯峨の日光と並び日本三大紅葉名所ともいわれています。ここ那馬溪は傾斜が多い地盤で2階建てでも平地より建物が大きく見えます。この家は、1階に大きなアツキがあり地盤の人々の交流、町のシンボリック

な家です。また、星空、秋になったら、紅葉を身近に感じられるように一般的な家より多くの窓や大きな吹き抜けを設ける事によって、自然の豊かさを見るすべての心の豊かさへと変化していくものだと考えました。

日本の四季を通じて、大分の風土ならではの木材の成長を確かめながら、歴史的な変化や代々何らかの形にして受け継ぐ事が未来へ伝える様子ができる拠点の家の1つとしてこの場所を選択しました。



【令和2年3月4日日刊大分建設新聞記事から】